特集◉神話的言説の図像表現と解釈

アメリカ合衆国における神話とイメージ

松村一男・和光大学表現学部教授

一　アメリカ合衆国における神話

アメリカ合衆国（以下、アメリカと略称）では大統領の就任式において聖書に手を置いて宣誓をする。また以下に紹介するように国家の機構や制度のさまざまな部分において神への言及が認められる。アメリカは基本的には宗教国家ではないし、特定の宗教、宗派が国家を支配しているということもない。しかし、そうした目に見える宗教とは別の、「宗教的」要素がアメリカにおいて国民に広く共有され、「聖なる」価値観を形成していると思われる。それを「見えない宗教」と呼ぶことも、「神話」と呼ぶこともできるだろう。ここではそうした聖なる価値観を形成している「見えない宗教」としての神話を物語とイメージ（図像表現）の両面から取り上げて検討してみたい。

日本人であるにもかかわらず、なぜ日本でなくアメリカを取り上げるのか、という疑問が当然出されるだろう。まずその点について説明しておこう。理由はアメリカが世界有数の多民族国家だからである。多民族国家という点ではインド、ブラジル、パプア・ニューギニア、中華人民共和国、旧ソ連邦、旧ユーゴスラヴィアなどもそうだが、国家規模の大きさ、世界に与える影響力、そして現在も存続しているなどの諸条件を考慮すれば、アメリカを対象として選ぶことはさほど不合理ではないだろう。またもう一つの理由は、上記の諸国、諸地域のうち、筆者がもっともよく知っているのがアメリカだからである。

多民族国家として、アメリカは近年とくにそうだが、特定の宗教を国教とするよりも、むしろ文化的多元主義（マルチ・カルチュラリズム）に基づき、多様な信仰の共存を理想として国家のイメージとしてきた（森、一九九六、五頁）。しかしもちろん、国家、国民のアイデンティティーをもつためにも全国民に共有されるような「神聖な」価値観は依然として必要とされる。加えて、アメリカの場合には建国してから二百年余りという比較的若い国で、古くからの伝統的価値観はなく、自らの手で作りださねばならなかった。それは独立戦争とか歴代の大統

領とかアメリカ史におけるフロンティア精神とか、さらに以下にも述べるようにさまざまあるに違いない。

学校教育やメディアなどを通して、時には無意識のうちに教え込まれる国民としての誇りは、目に見える「制度」としての宗教ではない「見えない宗教」さらには「神話」と呼べるだろう。国旗や国歌に対する尊敬の態度、「忠誠の誓い」（Pledge of Allegiance）やリンカーンのゲティスバーグ演説の暗記などはその一部である。ここで考えるのはそうした問題、いわゆる「アメリカン・ドリーム」についてである。

もちろん、日本においても「見えない宗教」とか「神話」と呼べるような「神聖な」価値観を保持する必要は存在しているが、それはアメリカの場合ほど切実なものではない。まず、アメリカと異なり、日本では数代前の先祖が別の国民だったという例は多くない。せいぜい地方から都会に出て来たくらいである。移民してきたことによる価値観の変化、異なる文化的背景をもった人々が共有できるような新しい価値観の提示、そして学習やメディアによるそうした価値観の習得は、日本ではアメリカのように重要な問題ではないだろう。

二　ディズニーという「聖なるもの」

ではアメリカにおける宗教とは別の神聖な価値観、つまり「アメリカの神話」とも呼べるものは何だろう。もっとも分かりやすい例は「ディズニー」だろう（能登路、一九九〇）。「ディズニー」といえば、いうまでもなくウォルト・ディズニーという個人の名前ばかりではなく、アニメのキャラクターや映画やディズニーランド、ディズニーワールドなどの形で表明されているアメリカ文化の理想の複合体を指す。そこに表明されている理想の世界はおそらくアメリカのどの宗教が提示している理想世界よりも強力なものであろう。多くのアメリカ人にとって、「ディズニー」的なもののない世界は考えられないに違いない。しかしたとえ聖書よりも強力な存在であっても、「ディズニー」は宗教ではないのだ。

宗教とは呼べないが神聖な価値観を示し、多くのアメリカ人が信奉しているものは、ディズニー以外にもあるはずである。それを探すに際しては、アメリカの生んだ神話学者ジョゼフ・キャンベル（一九〇四～八七）の学説を検討することがよい手がかりになると思う。

三　ジョゼフ・キャンベルと二十世紀神話学

世界的な神話学者としては、マックス・ミュラー（一八二三～一九〇〇）、フレイザー（一八五四～一九四一）、デュメジル（一八九八～一九八六）、エリアーデ（一九〇七～八六）、レヴィ＝ストロース（一九〇八～）らがいる。その中にキャンベルを加えてもよいだろう。他の学者たちがヨーロッパ、旧大陸生まれであるのに対して、キャンベルだけは新大陸の出身である。それはもちろん、アメリカが二十世紀に世界で最も豊かで強大な国家になったことと無関係ではない。ルーマニア生まれのエリアーデが学者としての後半期にアメリカを拠点としたのも同

じ理由からだろう。

これらの人々の神話理論を年代順に検討すると、ある傾向が認められる。それは、神話理解のカギとみなす要素が自然から社会、そして人間という方向、換言すれば大宇宙から小宇宙へと変化していることである。ミュラーとフレイザーは自然現象を神話の主たる要因とした。もっともその中では、ミュラーが太陽の運行という天上世界を重視し、フレイザーは植物の死と再生のサイクルという地上での現象を重視しており、より人間社会の方向への接近が認められる。デュメジルはフランス社会学派の影響下に、社会集団の神聖化が神話の要因とみた。そしてエリアーデは、神話とは社会を基礎づけるもので、歴史主義に抗する装置であると考えたが、それもまた神話を人間社会の水準の産物とする意見と見ることができよう。さらにレヴィ＝ストロースとキャンベルは、ともに神話が人間の無意識に基盤をもつとしている。もっとも、レヴィ＝ストロースの場合には構造言語学の理論的影響のもとに、神話を脳の理性的な働きの産物とし、キャンベルの場合は深層心理学の理論的影響のもとに、神話を心の感情的な働きの産物とする点では違いがある。

以上、二点を確認しておこう。第一に、キャンベルという神話学者がアメリカから誕生したことには歴史的な説明が可能である。第二に、彼の神話理論は神話学の展開の流れに合致しており、二十世紀神話学の典型といえる（松村、一九九九、特に二三九～二四四頁）。

四　ジョゼフ・キャンベルと英雄神話

ジョゼフ・キャンベルは一九〇四年にアイルランド系移民の子としてニューヨークに生まれた。彼は小さい頃、父親に連れられてマディソン・スクェアー・ガーデンでバッファロー・ビルのワイルド・ウェスト・ショーを見て感激し、アメリカ先住民の文化を学ぶことに熱中したという。長じて彼は、神話はシンボル言語で語られた「真実」の宝庫であり、解読のカギはフロイトやユングによる深層心理の理論にあると考えるようになる（松村、一九九九、第九章）。

そして彼が生み出した代表作が『千の顔をもつ英雄』（キャンベル、一九八四［原著一九四九］）である。題名からも分かるようにキャンベルは英雄神話を重視している。それはエリアーデが同時期に出版された著作において、創造神話にこそ神話の本質があると説いているのとは対照的である（エリアーデ、一九六三［原著一九四九］）。エリアーデが共同体の維持における創造神話の意義に注目したのと異なり、キャンベルは個人の能力による上昇、つまり「丸太小屋からの大統領」さえも可能とするアメリカの個人主義、あるいは「セルフ＝メイド・マン」のイメージにふさわしい英雄神話を重視したといえるだろう。このように神話の理論形成においては、時代や文化といった環境が影響を与えると考えられるのだ（もちろんこれは神話学の場合だけではない）。

キャンベルは、現代社会では神話が衰退し、その結果として

意識と無意識を結ぶ回路が切断され、生の意味が分からなくなっていると指摘する。だから現代の英雄的行為とは、精神的有意性を取り戻し、人間的な成熟を果たすこととなる。しかし彼は、こうした変革は、世界宗教や無意識から遊離した意識には期待できないとする。そうではなく、英雄神話を読むことによって、意識と無意識の回路を再び回復できるというのである。

キャンベルのこうした議論は学問よりもむしろ生活改善を目指す道徳運動のようにも聞こえるが、だからこそ無味乾燥になりがちな学者の議論にはない魅力があって、多くのアメリカ人に受け入れられたのだろう。ただし、必ずしもただちにそうなったのではない。彼が全米の注目を浴びるには、別のメディアの助けも必要だった。

五　映画の神話学

「ディズニー」と並んで、もうひとつアメリカ文化の神聖な価値観を提供してきたと思われるのが映画である。西部劇、イスラエルの民やキリスト教徒が迫害に打ち勝つ歴史もの、そしてジョージ・ルーカスと「スター・ウォーズ」に代表される宇宙もの（スペース・ファンタジー、スペース・サガ）と、時代は変わっても最後には必ず善が悪に勝つという図式は変わらない。この単純ともいえる善悪二元論に学術的な正当化を与えたと思われるのがキャンベルなのである。

ジョージ・ルーカスが一九七七年から製作を開始した「スター・ウォーズ」シリーズは全九篇で構想され、「スター・ウォーズ」、「帝国の逆襲」（一九八〇）、「ジェダイの復讐」（一九八三）、「エピソード1：ファントム・メナス」（一九九九）など現在まで五作品が製作されている。そして作品の構想に当たって、ルーカスがキャンベルの『千の顔をもつ英雄』から大きな理論的示唆を受けたことは、ルーカス自身がインタヴューなどで公言している。もちろん、このシリーズには西部劇、ローマ帝国を舞台にするトーガものと呼ばれる歴史映画、さらには日本の時代劇などの影響も見られる。しかし、ローマ帝国対キリスト教徒、ナチス対連合国、旧ソ連邦（「悪の帝国」）対自由の国アメリカのイメージと重ね合わされた善悪二元論の分かりやすい対決図式に、機械よりも精神の力（フォース）が勝るというキャンベルの神話解釈を組み合わせて作られた「スター・ウォーズ」シリーズでは、結局はアメリカがキリスト教徒、連合国の系譜を受け継ぐ現代における善の代表であり、その優秀性は機械（物質）によるよりも精神の高貴さによるのだとする価値観が色濃い。映画という大衆へのイデオロギー強化装置を通して、アメリカの聖なる価値観を伝えるのに、神話研究が力を貸しているのだ。もちろん、ナチス・ドイツにおけるアーリア民族選民思想の宣伝にゲルマン神話（ワグナー）や映画（レニ・リーフェンシュタール監督、「意思の勝利」、「民族の祭典」）が利用されたという先例はあるが、キャンベルの英雄讃美の神話理解は一度大衆に受容され、さらに映画という別のメディアを通じて、再びより大規模に大衆に届くようになったのである。

ベトナム戦争でのアメリカの介入の失敗は、アメリカに大き

な精神的な傷を残した。敵を撃滅する快感に、もはや単純には酔えなくなったのである。そのとき、二つの方向で精神的トラウマの解消が図られた。一つはベトナム戦争そのものを題材として検証しようとするもの。大変に数多くの作品が製作されたが、有名なものとしては、「カミング・ホーム（帰郷）」（一九七八）、「ディア・ハンター」（一九七八）「地獄の黙示録」（一九七九）、「ランボー」（一九八二）などがある（長坂、一九九五、第四章）。他方、別の世界に舞台を移し、そこでの勝利によって現実の傷を忘れようとしたのが、「スター・ウォーズ」シリーズであった。宇宙という別世界に舞台を移し、しかしアメリカの善と正義がその精神性の優位性とともにスクリーンに描き出されたとき、人々が熱狂してそれを支持したのはむしろ当然である。その「勝利の文化」の正義を確認するための理論的支柱が、キャンベルの神話学であった。

六　ローマ・アメリカ・銀河帝国

独立に際してアメリカはローマ共和政をモデルとして強く意識していた。トマス・ジェファソンのローマ好きはよく知られている。その名残が、たとえばアメリカの国会議事堂の通称キャピトル・ヒルである。これはローマで最高神ユピテルを祀る神殿があったカピトリウムの丘から取られている。また「共和党」（The Republican Party）という政党名は、ローマの共和政を尊重する意味でつけられている。さらに、オハイオ州の都市シンシナティーの地名もローマの英雄キンキンナートゥスの名から取られている。キンキンナートゥスは退役した将軍で、田舎で農業をしていたが、前四五八年、ローマが近隣のアエクィ人との戦いで危機に陥った際に求められ独裁官となり、ただちに敵を撃退して秩序を回復すると、その地位に固執することなく辞任して、再び田園生活に戻ったという（リウィウス、第三巻、二六―二九章）。彼は古いローマ人の質素さ・朴訥さの理想を示す伝説的人物であり、アメリカ初代大統領のワシントンもキンキンナートゥスに擬せられたりした。この他、硬貨に刻まれている合衆国のモットー「衆をもって一となす」はラテン語のE PLURIBUS UNUMであり、紙幣の方にもまた、ラテン語で「彼（神）は我等の行為に好意を示す」ANNUIT COEPTIS および「新しい時代の秩序」NOVUS ORDO SECLORUMと書かれている。

アメリカの建国当初のセルフ・イメージは、強大な英国や周囲を取り囲むフランスやスペインなど植民地の中にある脆弱な信仰篤き人々のコミュニティーであった。それはギリシア人やエトルリア人、さらには周辺のサビニ人やウェイイ人とも戦わねばならなかった、建国伝説に詠われている七つの丘の町ローマのイメージと重なるものであった。ローマの小さな地から国家として成長し、世界帝国になる過程、そしてさまざまな敵と戦い、征服し、傘下に収めて多民族国家となったことなど、アメリカにとってローマは手本であり、領土拡張政策であるフロンティア運動や、未開の地を支配することは文明化であるという支配の正当化の面でも見本となった。

しかしローマはプラスのイメージだけではなかった。カエサルの暗殺、共和政後の帝政期におけるキリスト教徒迫害、暴君ネロやカリギュラらのイメージなどである。それらは大帝国となった以上、不可避的な暗部ともいえるが、しかし、共和政ローマを理想としつつも、実際は領土を拡張して、大帝国となり、さらには海外での権益を保護するために自国ではない地域において戦闘をしなければならなかったアメリカのジレンマの象徴ともいえた。ベトナム戦争は朝鮮戦争やキューバ危機以上にそのことをアメリカ国民に痛感させた。アメリカは理想としては共和政ローマだが、現実にはローマ帝国だったのである。

「スター・ウォーズ」については、日本ではしばしば黒澤作品からの影響が指摘される。また剣による戦いでは西洋中世の騎士道と並んで、東洋の武士道、合気道、柔道などの師弟関係が理想として語られている。ジェダイの騎士の精神的指導者（ジェダイ・マスター）であるオビ・ワン・ケノービの名前も柔術の「黒帯」と無関係ではなさそうだ。このように、ジョージ・ルーカスは日本の侍映画、ヨーロッパ中世のアーサー王伝説、騎士道物語、さらにはトールキンが北欧伝説をヒントに作り上げた「指輪物語」なども参考にしてシリーズを作っているのだが、その中でも物語の骨組みとなっているのはローマ史と思われる。

物語は「遠い昔、はるか銀河の彼方で」という言葉とともに始まる。舞台となる銀河は、最初は「元老院」議員の合議で運営される銀河共和国であり、その防衛に当たるのがジェダイの騎士だった。しかし皇帝パルパティンが即位し、元老院は形骸化する。そして皇帝直属の指揮官ダース・ヴェーダーが銀河帝国に抵抗する者たちを滅ぼそうとするのである。フォースと呼ばれる特殊な精神力あるいは信仰の力を備えたルーク・スカイウォーカーに率いられた反乱軍＝共和国軍は数において劣りながら、最後には帝国軍の巨大要塞デス・スターを破壊し、勝利を収めるのである。

もちろん、帝国軍やダース・ヴェーダーの軍服にはナチスのイメージが色濃い。その面では、ルーカスはレニ・リーフェンシュタールの映画とくに「意志の勝利」を参考にしている。アメリカ人（とくにユダヤ系）にとって、悪の権化の姿はローマのトーガよりもナチスの軍服の方が分かりやすい。またレーガン大統領（一九一一～、任期一九八一～一九八九）が「スター・ウォーズ計画」という言葉を用いて、対ソビエト・ミサイル撃墜システムの構築を提唱したことからも明らかなように、悪の帝国には当時のソビエト連邦の姿が重ねられていた。しかし、上記の短い紹介でも分かるように、共和政とか帝国とか元老院とか皇帝とか、用語の多くはローマ史から採られている。そして反乱軍＝共和国軍はアメリカに重ねられ、巨大な敵に対して、精神性で勝るがゆえに勝利するという「神話的」イデオロギーが特殊効果によってあたかも現実であるかのようにスクリーン上に映し出されるのだ（ベトナム戦争、スター・ウォーズ、ローマ史の関連については、Winkler 論文による）。

七　神話学からの展望

神話は神聖な価値観を含む物語である。物語の利点であり場合によっては欠点となるのは、物事を単純化し、人々が分かりやすい典型的なパターンにそって示すことだろう。もちろん、宗教もまたそうした聖なる物語としての神話を必要とする（イエスの生涯から神話的要素を排除しようとするブルトマンらの非神話化の動きは、逆に宗教の活力をそぎかねない）。こうした物語の作用は過去の美化や正当化ばかりでなく、未来の美化や正当化も生み出す。未来は過去の図式の延長だからだ。過去はこうであった、だから未来はこうなる、あるいはこうなるべきだという議論である。もちろんそれがただちに悪いというのではない。かつて移民によって建国されたアメリカという聖なるイメージは、これからも自由の砦としてアメリカが世界の多くの人々を受け入れていく際に強力な力となるだろう。

しかし、次のような例はどうだろう。アメリカは無人の世界あるいは文化のない世界としてのフロンティアに進出し、そこに理想の世界を作り上げたという「フロンティアの神話」だ。かつてアメリカは旧ソ連との宇宙開発「戦争」に熱中し、レーガン大統領の時代にミサイルによる防衛システムを構築するという「スター・ウォーズ計画」を推進したが、おそらくそれは宇宙をアメリカにとっての新たなフロンティアと見なしていたからであろう。火星探査衛星の派遣も宇宙ステーション建設も、その背後にアメリカの「聖なる物語」が潜んでいないか、気になる。

宗教学と部分的に重なりつつ、しかし宗教学プロパーとは異なる視点をもって、神話学は「聖なるもの」の分析を行う。神話学は必ずしも宗教ではない現象についても対象とする点が宗教学とは異なる。しかしすでに述べたように、「聖なるもの」への関心を宗教学と神話学は共有しており、そのため神話学は独自の視点からの分析によって宗教学をより豊かにする可能性をもっている。

しかし問題がないわけではない。神話学は学問分野として正式に認知されてこなかった。その結果、よくいえば自由な、悪くいえば野放しな状態で、それぞれの研究者が自分の思い描く「神話」について理論を述べがちであった。極端にいえば、学界による行き過ぎへの監視や抑止はないし、その逆の学界による業績の評価もない。結果として、一般読者の人気というものが評価の基準となりがちだったのである。

キャンベルの場合はそれを典型的に示しているといえるかも知れない。キャンベルの問題は、神話の分かりやすさが場合によっては特定の目的に利用されることがあるという神話のはらむ危険性について充分な警告を発さず、神話の利点のみを強調することだろう。なぜそうなったのかといえば、神話についてのキャンベルの理論がアメリカ文化の理想を正当化するものとして構想されている部分があるからではないだろうか。意図してか、あるいは意図せずなのか、ともかくキャンベルの英雄神話中心の神話学はアメリカ文化の理想、アメリカン・ドリーム

を正当化するのに寄与した。そして映画という異なるメディアにおいても、アメリカン・ドリームを讃美し、その神聖化を推進する理論的支柱となった。

もちろんこれはキャンベルの神話学の問題点だけを指しているのではない。その神話学を生み出し、広く受け入れているアメリカ文化の「聖なるもの」の価値観にも問題があるといっているのだ。

このように、アメリカを理解するためには、既成宗教やデノミネーション（教派）だけでなく、アメリカらしい文化現象にも注目する必要があるだろう。アメリカの映画も政治もスポーツもテーマパークも、そして歴史さえも、すべて「現代アメリカの神話」あるいは現代アメリカの見えない価値体系として分析の対象となるのである。[*1]

八　付論　ユダヤ・キリスト教系の『アメリカ神話』

アメリカの国家イメージはその根幹をローマ、とくに共和政ローマに有し、その意識は現代の映画「スター・ウォーズ」シリーズにまで続いていると指摘したが、「アメリカ神話」はこの一つの流れだけではなく、聖書にもまたもう一つの有力な神話的パラダイムを有していると思われる。

アメリカは迫害を逃れ、信教の自由を求めて植民してきた人々によってまず建国された。最初の一団であったピューリタンたちにとって、旧約聖書のノアに率いられてエジプトを出て、約束の地に向かうイスラエルの民の姿を自分たちと重ね合わせることは、ごく自然であった。彼らもまた、迫害者に追われつつ、海を渡り、食料の不足に悩みながら、そこが神の約束した土地であると信じたのである。そして独立後にも、出エジプト記での記述の成就としてアメリカの将来を考える傾向は、さらに続いた。それは西部の位置づけである。次第に割譲、買収、併合などによってアメリカは領土を拡大し、太平洋まで至る国土を獲得するが、この未開拓の広大な土地、つまり大西部をアメリカ人はフロンティア「辺境」と呼んだ。この未開拓の地、砂漠のある荒れ地、無法の地、異邦人であるインディアンの住む土地は、出エジプト記のシナイの荒れ野に重なるものだった。そこを通ってさらに西に進んで、「約束の地」であるカリフォルニアに至るのである。その際には、アメリカこそ新しきイスラエルであるとか、神に選ばれた国家であるとか、だからこそ北米全土さらには世界全体にわたって政治的・軍事的・経済的に支配し、指導することが許される、それが「明白な運命」であるという「領土拡張政策」いわゆるマニフェスト・デスティニーが持ち出された。このようにアメリカにおける「神話化」とは、宗教プロパーの領域においても認められる。つまり、聖書を自国の運命を予知し、祝福するものとして読むという形態における「聖書の神話化」である。[*2]

注

＊1　こうした誘惑を最初に覚えたのは、アメリカ研究を専門とする能登路雅子さんの『ディズニーランドという聖地』（一九九〇）を読んだことが契機だった。ディズニーランドの宗教性や神話性はその後賛同を

呼び、いまでは当然視されているが、最初にそれを指摘したこの本の意義は大きい。そしてそれを契機として、私はスーパーマンやケネディーやサザエさんという項目のある神話事典を編んでみたいという構想を持ちつづけてきている（松村、二〇〇二）。

そして今回の草稿を準備する過程で、アメリカ人の精神的統一を維持するような、現代アメリカの神話とそのイメージ表現を探る試みが、アメリカ本国では当然ながらすでに、私が考えたよりもはるかに洗練された形で行われていることを知った。それらを活用することは、すでに自分の考えがある程度固まった段階になっていたため、今回は差し控えた。ここではその存在を書名とともに記すに留める。エンゲルハート『勝利文化の終焉』（一九九五）とローレンス＋ジェウェット『アメリカのスーパー・ヒーローの神話』（二〇〇二）である。

またより個別的なテーマからアメリカ文化の神話性を探ろうとする試みについても、何点か管見の範囲で紹介しておきたい。まずラス・ヴェガスについてのスパニャーの『快楽ドームへようこそ』（一九九二）、伝説的トリックスターとしてのディヴィー・クロケットを取り上げるロファロ＋カミングス編の論集『クロケットの二〇〇年』（一九八九）、そしてインディアンが映画でどのように描かれてきたかを検証する、キルパトリックの『セルロイドのインディアン』（一九九九）、二十世紀における「西部」の神話性を論じるロバート・エイサーンの『二十世紀アメリカにおける神話的西部』（一九八六）、アメリカ政治の神話性を指摘するマイケル・パレンティの『偶像の地―アメリカの政治神話』（一九九四）、スポーツと宗教の共通性を指摘するロバート・ヒッグスの『スタジアムの神―アメリカのスポーツと宗教』（一九九五）などである。

＊2　もちろん、出エジプトによるフロンティア運動の意義付けは自明のことであって、すでに数多くの研究がなされている。たとえば代表的なものとしては、スミスの『ヴァージンランド―象徴と神話の西部』（一九五〇）やスロートキンの『暴力による再生―アメリカ・フロンティア一六〇〇―一八六〇の神話』（一九七二）などがある。

参考文献

エリアーデ、ミルチア（堀一郎訳）『永遠回帰の神話』未来社、一九六二
(Eliade, Mircea, *Le mythe de l'eternel retour*, Gallimard, 1949)

キャンベル、ジョゼフ（平田武靖／浅輪幸夫監訳）『千の顔をもつ英雄』上下、人文書院、一九八四（Campbell, Joseph, *The Hero with a Thousand Faces*, Princeton U.P., 1949）

スミス、H. N.（永原誠訳）『ヴァージンランド―象徴と神話の西部』研究社、一九七一（Smith, Henry Nash, *Virgin Land: The American West as Symbol and Myth*, Harvard U. P., 1950）

長坂寿久『映画で読むアメリカ』朝日新聞社、一九九五

能登路雅子『ディズニーランドという聖地』岩波書店、一九九〇

森孝一『宗教からよむ「アメリカ」』講談社、一九九六

松村一男『神話学講義』角川書店、一九九九

――――「『神話学小事典』の構想」、蔵持不三也他編『神話・象徴・イメージ』原書房、二〇〇二、一二九～一八六頁

Athearn, Robert G., *The Mythic West in Twentieth-Century America*, U. P. of Kansas, 1986

Engelhardt, Tom, *The End of Victory Culture: Cold War America and the Disillusioning of a Generation*, U. of Massachusetts P., 1995

Higgs, Robert J., *God in the Stadium: Sports & Religion in America*, The U. P. of Kentucky, 1995

Kilpatrick, Jacquelyn, *Celluloid Indians: Native Americans and Film*, U. of Nebraska P., 1999

Lawrence, John Shelton and Robert Jewett, *The Myth of the American Superhero*, William B. Eerdmans Publishing Company, 2002

Lofaro, Michael A. and Joe Cummings ed., *Crockett at Two Hundred: New Perspectives on the Man and the Myth*, The U. of Tennessee P., 1989

Parenti, Michael, *Land of Idols: Political Mythology in America*, St. Martin's Press, 1994

Slotkin, Richard, *Regeneration through Violence: The Mythology of the Ameri-*

can Frontier, 1600-1860, Wesleyan U. P., 1973

Spanier, David, *Welcome to the Pleasuredome: Inside Las Vegas,* U. of Nevada P., 1992

Winkler, Martin M., "Star Wars and the Roman Empire", in Martin M. Winkler ed., *Classical Myth and Culture in the Cinema,* Oxford U. P., 2001, pp.272-290